

ごあいさつ



理事長

中村安秀

パプアニューギニアのエンガ州病院にて。左は小児科医のパナウウェさん

2019年1月に、パプアニューギニア独立国のエンガ州という山岳地帯を訪問しました。NPO法人HANDSが実施するJICA草の根技術協力プロジェクト「山岳地域の女性が元気に暮らせる村づくりプロジェクト」の短期専門家としての仕事でした。

道路は舗装されておらず、高低差の激しいつづら折りの山道が続くなか、多くの地区で100人以上の村人が私たちのチームを待っていていました。集会場所まで、遠い人だと3時間の山道を歩いてきたとのことでした。「日本の人びとがわざわざ辺鄙な村まで来てくれたこと」に対して感謝の言葉をいただきました。自分たちの手で健康を守りたいというコミュニティの熱意に圧倒され、プライマリヘルスケアの原点に触れる思いがしました。

そのパプアニューギニアの山岳地帯の病院の小児科病棟。肺炎や栄養失調の子どもに交じって、神経芽細胞種という小児がんの子どもが入院していました。また、ポリオが発生したとのことで、病院の外来ではポリオ経口ワクチンの集団一斉投与が行われていました。プライマリヘルスケアと同時に、感染症や小児がん対策にも大きなニーズがありました。「だれひとり取り残さない」という持続可能な開発目標（SDGs）の理念を抱いて、困難な課題に果敢に挑戦している保健医療者の姿が、まぶしかったです。

最近、とてもうれしいニュースがありました。

2019年2月に、公益社団法人日本医師会様を正会員(法人)としてお迎えすることができました。早速、2019年6月には、G20大阪の前に、世界医師会と日本医師会が主催しWHOが協力して、「H20：Health Professional Meeting 2019」が東京で開催されます。横倉義武会長のご理解に感謝するとともに、今後はいろんな場面で協働させていただくことを楽しみにしています。

最後になりましたが、新装なった『目で見るとWHO』（2019年春号）をお届けできることを、大変喜んでおります。2018年6月に日本WHO協会の理事長を拝命して以来、WHOの活動をこれまで以上に「目で見ると」形で皆様方にお伝えしたいという気持ちで取り組んでまいりました。

デザインと編集スタイルについては、根本睦子さんと森井真理子さんにご指導をいただきました。安田直史理事が編集長としてリーダーシップを発揮し、若い方々が中心となって編集委員会に参画し、大阪商工会議所内にある日本WHO協会の部屋で夜遅くまで議論しながら、作っていただきました。みんなの思いがこもった『目で見るとWHO』になりました。トライ・アンド・エラー。これからも、失敗を恐れずに試行錯誤しつつ、魅力ある機関誌にしていきたいと考えています。

会員の皆さまからの忌憚のないご意見、あるいは励ましの声などをどしどしお寄せいただけるとありがたいです。何とぞよろしく申し上げます。

2019年4月